

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：24506

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580082

研究課題名(和文)医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立

研究課題名(英文)Verification of the Versatility of Narrative Data in Medicine, Psychology, and Education and Establishment of Analytical Methods for Narrative Studies

研究代表者

奥田 恭士 (Okuda, Yasushi)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：10177173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、第一に、先行研究等を通して、ナラティブ・データに汎用性があり、データ収集方法にも改善の余地がある点が明らかになった。第二に、ナラティブ研究において、非文学テキストに文学的手法を導入することの有効性が確認された。第三に、“ナラティブ研究の可能性”と題する公開シンポジウムおよび最終年度に発行した『研究成果報告書』によって、本研究成果を公開・発信することができた。最終的には、文学研究がこれまで直接的に関わってこなかった医療等の分野への貢献が期待され、その社会的還元が見込まれる点が大きな成果と言える。

研究成果の概要(英文)：Our achievement in this research project can be summarized as follows. Firstly, our inspection of seminal studies, document investigation and group discussion have clarified the versatility of narrative data and spotlighted the need to improve the procedure for data collection. Secondly, through this interdisciplinary project, we have effectively applied textual analytical methods, such as narratology, stylistics and discourse analysis, to the study of non-literary texts. Thirdly, we gave presentations on our research results at a symposium entitled “Possibilities of Narrative Approach” and published a research achievement report on this project, so that we could attract interests from researchers in other fields as well. Finally, we have confirmed that literary studies can contribute to the solution of some problems faced by our rapidly aging society, and we believe that more significant findings will be made in the new Grant-in-Aid for Scientific Research(C) starting from 2016.

研究分野：フランス文学・物語論

キーワード：多面的ナラティブ分析 物語論 文体論 ディスコース分析 健康科学 臨床心理学

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した平成 25 年度 (2013) において、医療・心理・教育におけるナラティブ研究は相応に進展を見せていたとすることができる。医療分野では NBM (ナラティブ・ベイスト・メディスン) の概念が浸透しており、特にリタ・シャロンが著した『ナラティブ・メディスン』およびこれを日本に紹介した斎藤清二らの展開の中に医療における「ナラティブ」の重要性が理解できる。また、NBM とは異なる歴史的背景を持つ心理臨床分野においては、『ナラティブと心理療法』(森岡正芳編)、『質的心理学の方法—語りをきく—』(やまだようこ編)などの研究を通して、ナラティブ・セラピーに関する独自の理論展開と実践が行われてきた。加えて、親近性のある複数の分野が協力し、「ナラティブ」を軸とする現場での有効な活用への模索が、例えば雑誌『N:ナラティブとケア』創刊を契機に始まりつつあった点が特筆できる。このように、「ナラティブ」というキー概念はその重要度を増してきたことが分かる。他方、教育分野では、『リフレクティブな英語教育をめざして—教師の語りが拓く授業研究』(吉田達弘他編)を一例とし、教師教育等においてナラティブ分析の有用性が問われており、本研究をスタートさせるに際して、分野ごとに「ナラティブ」に関心が高くなっていったとすることができる。

しかし、一方で、「ナラティブ」研究の理論、手法、データ解析は、それぞれ独自の方法で行われており、ナラティブがどのような汎用性を持つかについての包括的な視点は技術的な難しさも原因となり、あまり模索されてこなかったという現状がある。とりわけ、本来的に最も「ナラティブ」と関係性の深い文学・物語論・文体論・ディスコース分析の分野において、文学テキスト分析やフレームワーク分析などを医療・心理・教育における非文学テキストへ応用するという考え方は見られなかった。本研究は、同じ大学に所属する健康科学、臨床心理学を専門とする研究者が、文学、物語論、文体論、ディスコース分析を専門とする研究者と意見交換を行うことによって発案されたものである。例えば、高齢者施設でのインタビューについて議論するとき、語りという行為が結果的に認知力の改善に寄与する傾向にある点は分かるが、それがどのような内面の変化を生じさせるのかという視点から、語りの効果を「証明」するには依然としてデータに乏しいのが実情であった。語りそのものの文学性や独創性へ目を向けることで、この点が解明できないかという着想が本研究の着眼点であったと言える。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、物語論・文体論・ディスコース分析の手法を、医療・介護・カウンセリング・教育等の分野で行われる語り

の分析に援用し、ナラティブ研究の汎用性を検証することであった。本来特定の作家の物語・文・語彙に見られる特徴を研究対象とする物語論・文体論が、その成果を使って、多様なジャンルの「非文学テキスト」のナラティブ分析にどの程度汎用性を確保できるかという課題である。上記背景でも述べたが、語りという行為による内面の変化や認知力の改善に着目した医療・心理・教育分野での研究はつとに進められている。これらの研究は現代社会が抱える問題点に呼応する形で発展したもので、「語り」と人間性という観点からも今後さらなる発展が期待できる。これらのデータを収集する際、物語論・文体論・ディスコース分析が可能となる条件づけは何か、まずこの点を研究グループ間で精査・検討した。

これまでのナラティブ研究では、内容面を重視する質・量的研究や成長度や治癒効果に特化する研究が多く、語り手の用いる技巧や文体面での変化に関してはほとんど議論されてこなかった。医療分野では、患者が自らの体験を「語る」ことによって得られる治療効果が注目され、また教育現場では教師の成長を教師自身の行う「語り」から測定する研究が主流である。そこで、本研究ではこのような内容面を重視した質・量的研究に加えて、非文学的な語りを「文学作品」とみなし、物語論・文体論等から援用できるテキスト分析と考察を加えることにより、非文学的な語りの「独創性」や暗示的意図および効果の顕在化を試みることを第二の目的とした。

3. 研究の方法

研究の第一段階として、まず医療・心理・教育等の各分野における先行研究を行い、ナラティブ分析の援用例を中心に、テキスト分析の手法が各分野でどの程度浸透しているかについて調査した。具体的には、ナラティブ研究の発展経緯および理論に関する基本書や、それぞれの分野の専門雑誌から、特に仮説設定に有効と思われる質的および量的研究を精査し、「非文学テキスト」において「語り」という行為がどのような効果を生み出しているかという課題について検討した。

研究の第二段階では、上の作業で検討した問題点に留意しながら、ナラティブ・データの収集を行った。またそれに先立ち、語り手のプライバシーやデータの客観性など、ナラティブ研究の汎用性を検証する上で前提となる問題点の抽出を試みた。非文学テキストの文学的分析においては、それまで生じてこなかった新たな倫理的問題が浮上する点についても精査した。

研究の第三段階では、ナラティブ・データの収集を進めると同時に、健康科学および臨床心理学を専門とする研究分担者がそれぞれの専門分野において通常おこなうインタビューのうち、特に提供の了承を得ることのできた対象群について、二系列の事例提供を

受け、研究代表者・奥田恭士（物語論・フランス文学）分担者・寺西雅之（英語文体論・物語論）および糟屋美千子（ディスコース分析）の3名が、各自の視点から分析を行った。

4. 研究成果

本研究の成果として、(1) ナラティブ・データの汎用性の検証とデータ収集方法の改善 (2) ナラティブ研究における文学的手法導入の有効性の確認 (3) シンポジウムおよび研究成果報告書による成果の公開と発信 (4) 文学研究の社会的還元と新たな可能性の展望、の4点が挙げられる。以下項目ごとに要点を整理する。

(1) ナラティブ・データの汎用性の検証とデータ収集方法の改善

研究代表者・奥田恭士は、先行研究、資料調査、グループ討議を通して、「なぜ今ナラティブか? - その現状・背景・問題について -」(『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第18号, 67-76, 2016)をまとめ、ナラティブ・データが持つ汎用性と各分野への浸透度を検証した。「ナラティブ」をキー概念とする研究は、文学・言語学の領域をはるかに越えて、現在、医療をはじめとする様々な臨床現場、芸術に関わる空間創造や広告・経営の領域にまで広がっている。また、シンポジウムの成果として、「文学」と「非文学」を繋ぐ接点としての物語論・文体論・ディスコース分析の重要性が確認された。このような汎用性の確認に立脚した上で、ライフレビューやインタビューの記録等、公開意図のない個人的なテキストをどう扱うかを精査した。その結果、データの取扱いに関して、新たな倫理的問題が生じる点が明らかとなった。データ収集方法の改善については、例えば、インタビューの準備として、被験者への質問様式やフォーマット、データの記録方法(録音と聞き書き)の使い分けについて検討した。これらの作業を通して、ナラティブ・データの汎用性が確認され、データの収集方法の改善に寄与すると同時に、分析手法の確立に向けてその有効性が担保された点が、本研究成果の一つと言える。

(2) ナラティブ研究における文学的手法導入の有効性の確認

本研究において、医療・心理・教育など従来「語る」という行為の「効用」に着目してきた分野に文学的視点を導入することにより、これまでの研究に有用な検証成果を得ることができた点がもうひとつの成果である。例えば、内面や認知機能に困難を抱える被験者が回復前に行う語りの特徴と、回復後に行う語りの特徴に関して言語学知見によりこれまで見逃されてきた変化や相違点を明らかにし、「語り」の効果が改めて認識されることになり、高齢者医療や臨床心理の分野にとって一定の貢献を果たしたと考えられる。

一方、分析手法の側、すなわち物語論・文体論・ディスコース分析の分野においても、医療・心理・教育等、これまで文学研究がカバーしてこなかった異分野の「語り」の分析において、その手法の有効性が確認され、当該分野の教育・研究の重要性を再認識するに至っている。また収集された実際の「語り」と比較することにより、文学作品の語りの構造や心理描写の分析・解釈にも新たな示唆が得られた。これらの成果は、研究成果報告書に掲載の論文からも明らかであり、とりわけ、研究分担者・寺西雅之は、本研究発表をもとに、内田勇人との共同発表(「庶民的ナラティブ」の文体 介護老人保健施設入所者の事例より、日本国際教養学会第5回全国大会)を行い、高齢者のライフ・レビューを対象とした文体論的分析の有効性を立証した。

(3) シンポジウムおよび研究成果報告書による成果の公開と発信

グループ全体の主要な活動の一つとして、平成26年9月27日に、科研費研究グループ主催、国際文体論学会・日本国際教養学会後援公開シンポジウム『ナラティブ研究の可能性 その理論から実践まで』(於兵庫県立大学環境人間学部)を開催した。基調講演(奥田恭士) 招聘講演(岡山大学医療教育統合開発センター・伊野英男教授) 研究発表(寺西雅之、糟屋美千子、井上靖子、内田勇人)のあと、パネル・ディスカッションおよび会場参加者との質疑応答を通して、ナラティブ・データの汎用性が再認識され、ナラティブをキーワードとする異分野間での相互理解を行うことができた。日本国際教養学会ホームページ等で広報し、記録として残している。

また、本研究を総合する共同研究の成果発表として、奥田恭士編『医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立』(平成25年度~平成27年度科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究成果報告書)を平成28年3月に報告冊子の形で印刷・製本・配布した。これらはいずれも、これまでの三カ年の研究実績を基盤としながら、最終年度にあたり全体を総括する目的で行われた成果発表である。

(4) 文学研究の社会的還元と新たな可能性の展望

高齢者人口が増加する一方で、社会的中樞を担う若者たちが心理的危機に直面する事例も少なからず存在する。また、予測を越えて進化する今後の情報化社会において、ナラティブ研究は、ピボットの役割を果たす可能性がある。文学領域の研究者は、これらを広く包含する医療現場の実態にこれまであまり直接的な関わりを持ってこなかった。しかし、高齢者の「老後」や青少年の「育ち」という場に、「ナラティブ」を軸としてわれ

われが関わることには、研究を社会に還元するということだけではなく、新たな文学研究の可能性を模索するという点でも意味がある。共同研究で収集した事例分析を含め、成果報告書において、非文学テキストをどうとらえるかという問題の一端に触れ、新たな可能性を展望することができた点は特筆できる。本研究は挑戦的萌芽研究として採択されたが、この発展として平成28年度より、「基盤研究(C)一般」として新たな研究推進が可能となった。本研究の重要性が認められた点が、最大の成果と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

奥田 恭土、「なぜ今ナラティブか? - その現状・背景・問題について - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第18号、査読有、2016、67-76

奥田 恭土、「“示し話し語り直し”ているのは誰か? - ライフレビューのSummaryについて - 」、『医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立』(平成25年度~平成27年度科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究 研究成果報告書) 査読無、2016、75-92

内田 勇人、「介護老人保健施設入所高齢者に対するライフレビュー介入の試み」、前掲報告書、査読無、2016、37-46

寺西 雅之、「庶民的ナラティブの文体 - 介護老人保健施設入所者の語りから見えること - 」、前掲報告書、査読無、2016、1-18

井上 靖子、「「母なるもの」についての臨床心理学的一考察 - KJ法による質的研究の意義を通して - 」、前掲報告書、査読無、2016、19-36

糟屋 美千子、「人生の物語における考え方の枠組みのディスコース分析 - 児童養護施設経験者の語りから - 」、前掲報告書、査読無、2016、47-74

井上 靖子、「児童養護施設経験者の心理と支えについての一考察 - 『語られない語り』への関わりの観点から - 」、『兵庫県立大学環境人間学部 研究報告』第17号、査読有、2015、1-13

井上 靖子、「虐待を受けた子どもの遊戯療法 - 『母なるものの元型』のイメージ化とその両義性の結合の観点から - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第16号、査読有、2014、11-21

Murayama Y, Ohba H, Yasunaga M, Nonaka K, Takeuchi R, Nishi M, Sakuma N, Uchida H, Shinkai S, Fujiwara Y. The effect of intergenerational programs on the mental health of elderly adults,

Aging and Mental Health, 査読有, 2015 Apr; 19(4): 306-14

奥田 恭土、「提示部におけるバルザックの戦略 - *Madame Firmiani* - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第16号、査読有、2014、165-174

井上 靖子、「虐待を受けた子どもの遊戯療法 - 「母なるものの元型」のイメージ化とその両義性の結合の観点から - 」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』第16号、査読有、2014、11-21

内田 勇人、藤原佳典、西垣利男、香川雅春、江口善章、藤井明美、吉田隆三、作田はるみ、木宮高代、濱口郁枝、東根裕子、平尾浩子、山本 存、矢野真理、松浦伸郎、「高齢者による自然体験活動支援が児童養護施設入所児童の高齢者イメージに及ぼす影響」、『日本世代間交流学会誌』, 3(1), 査読有, 2013, 11-18

[学会発表](計12件)

寺西 雅之・内田 勇人、「庶民的ナラティブ」の文体 介護老人保健施設入所者の事例より、日本国際教養学会第5回全国大会、2016年3月13日、東京理科大学葛飾キャンパス(東京都葛飾区)

塩谷 望・寺西 雅之、「英語学習に関するモチベーションと実現可能な学習法に関する調査」、兵庫県立大学知の交流シンポジウム2015(ポスター発表)、2015年9月28日、神戸市産業振興センター(兵庫県神戸市)

Kasuya, M., Developing Students' Critical Awareness of Language and Power through Critical Discourse Analysis. Pragmatics and Language Education Workshop, Hiroshima, Japan, 2015.

Hayato Uchida. "The environmental learning program for the children in a child welfare institution offered by the senior volunteers and its influence on children's images of the elderly". World Congress of Gerontology and Geriatrics, 3rd International Conference on HEALTHY AGEING IN THE CHANGING WORLD 2014, Bangalore, India, 18th November, 2014

奥田 恭土・伊野 英男・内田 勇人・井上 靖子・糟屋 美千子・寺西 雅之、「ナラティブ研究の可能性:理論、実践、そして発展に向けて」(ポスター発表)、日本国際教養学会第4回全国大会、2015年3月14日、岡山大学(岡山県岡山市)

奥田 恭土、「なぜ今ナラティブか」、科研費研究グループ主催・国際文体論学会・国際教養学会後援公開シンポジウム『ナラティブ研究の可能性 - その理論から実践まで - 』、2014年9月27日、兵庫県立大学環境人間学部(兵庫県姫路市)

寺西 雅之、「Narrative is everywhere」:小説からユーモアの語りまで」前掲シンポジウム、2014年9月27日、兵庫県立大学環境人間学部(兵庫県姫路市)

糟屋 美千子、「ストーリーとしてのニュース ニュース・ナラティブのクリティカル・ディスコース分析による検討」前掲シンポジウム、2014年9月27日、兵庫県立大学環境人間学部(兵庫県姫路市)

井上 靖子、「児童養護施設経験者の心理とその支えに関する一考察～「語られない語り」への関わりの観点から～」前掲シンポジウム、2014年9月27日、兵庫県立大学環境人間学部(兵庫県姫路市)

内田 勇人、「施設入所高齢者の回想による認知機能回復」前掲シンポジウム、2014年9月27日、兵庫県立大学環境人間学部(兵庫県姫路市)

井上 靖子、「虐待体験からの回復-遊び・イメージ表現を通して」日本子ども虐待防止学会第19回学術集会信州大会ポスターセッション(口頭発表)、2013年12月14日、信州大学松本キャンパス(長野県松本市)

内田 勇人,西垣利男,江口善章,黒田次郎、「児童養護施設入所児童に対する自然体験活動支援事業が児童の大学生と高齢者の各イメージに及ぼす影響」日本世代間交流学会第4回全国大会、2013年10月5日、東京都健康長寿医療センター(東京都板橋区)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://jaila.org/activity/symposium2014>

[0927/poster_symposium_20140927.pdf](http://jaila.org/activity/symposium2014)

<http://jaila.org/activity/symposium2014>
[0927/JAILA-symposium20140927.pdf](http://jaila.org/activity/symposium2014)

6. 研究組織

(1)研究代表者

奥田 恭士(OKUDA, Yasushi)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号:10177173

(2)研究分担者

内田 勇人(UCHIDA, Hayato)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号:50213442

寺西 雅之(TERANISHI, Masayuki)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号:90321497

井上 靖子(INOUE, Yasuko)
兵庫県立大学・環境人間学部・准教授
研究者番号:00331679

糟屋 美千子(KASUYA, Michiko)
兵庫県立大学・環境人間学部・准教授
研究者番号:20514433